

「一般の部」最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

テーマ：おおいたの子どもたちへ

「父の背中」

福田八重子（国東市在住）

私は高くて真っ青な故郷の秋が好き。今日は久し振りに墓参り。「少し、うれしい話があるので来ましたよ、お父さん」父が亡くなって、早8年目を迎えようとしている。働き者で頑固で厳しかった父。他人に迷惑をかける事を極端に嫌った。酒にもたばこにも縁が無く、人との交わりをもあまり好まなかった父。人生で何の楽しみがあったのであろうかとふと思う時がある。そして、又、仕事一筋の父は子どもと触れ合う時間もあまりなかったような気がする。

父の朝は早かった。暗いうちから農作業に出る。ひと仕事終え、一度家に帰り、朝食をすませると又、すぐ出る。忙しい時期になると母も朝早くから外に出て家にいない。子どもだけで朝食を食べ、自分で弁当を準備する。学校から帰っても誰もいない。テーブルの上に「山の上の畑に草取りにおいで」「野菜畑のナスを取って夕食のみそ汁を炊き」など、メモがいつも置かれていた。私は学校から帰るとそのまま、畑に急ぐ。夕方は食事の準備があるので頼まれた畑仕事を先に終わらせなければならない。その当時、どこの家の子ども達も学校から帰ると家の手伝いをした。弟たちも牛や豚の世話から風呂焚き、台所への水運びなどそれぞれに任された仕事があり、夕方はみんな忙しかった。あたりが暗くなり、父が仕事から帰る頃、決められた事が出来ていないときつく叱られる。その時の父の目はこわかった。大きい声も恐ろしかった。ある時、友だちとの約束をやぶり、父にばれた事がある。注意する父の声はいつもより大きく、荒っぽく聞こえ、私は泣き出してしまった。今、思えば不器用な父のしつけであったのであろう。そんな事があってから私にとって父は怖い人というイメージが心の中に焼きついてしまった。

父は勉強よりもそれぞれに与えた家の仕事が出来ていない時叱る。時々、手も出た。しかし、小学校5年生の時、ある一つの出来事がきっかけで私の父に対する気持ちが変わっていった。まだ、寒さが残る4月。私は深夜、高熱と激しい下痢でぐったりなってしまった。苦しむ私を疲れているであろう父は背中に負ぶって、昭和20年代、まだ車など無い時代、坂の多い山道を一時間程かけて歩き、隣り村の医者まで連れて行ってくれた。医者についた父は玄関を激しくたたき、医者を起こした。診察を受け、手当てされ、落ちついた私を父は又、負ぶった。初めて触れた父の背中は広くて温かかった。夜道は暗くて恐ろしかったが父の背中で安心したのであろう。いつのまにかぐっすり眠ってしまった。翌朝、起きた時、父は仕事に出ていなかった。「ありがとう」と言えないまま、その日は終わった。後にも先にも私が父の背中に負ぶされたのはその時だけだったと思う。でも、なぜか、あの怖かった父のイメージが少しずつ私の心の中で変わり始めた。

やがて、働き者の父も年をとり、病の床に伏すようになった。そんな時、母と二人で風呂に入れた。弱々しい父の背中をながす私。子どもの頃、暗い山道を私を負ぶって病院へ急いだたくましい背中はどうもなかった。いつのまにか体は小さくなり、大きな声も消えた。風呂から上がる父の両手を強く握る。でも、もう握り返してはくれなかった。働き者の父はよく食べた。大きな茶碗でお代わりもした。その父もやがて、口から食べられなくなり、点滴になった。そして、年が明け、雪の舞う冷たい朝、89才で逝った。

私は人生につまずいた時、いつも、あなたの力をもらいます。「お父さんあなたの見守った子どもは強くしっかり生きていますよ」腰の少し曲がった母は今年88才になる。父が一年中、花を楽しめるようにと墓の周りにせっせと花を植える。久し振りに手を合わせる私の足元でききょうの花が小さく揺れた。厳しかった父と優しい母。私はあなたたちの子どもに生まれて幸福でした。ありがとう。

「おおいた教育の日」エッセー
「一般の部」優秀賞

テーマ：おおいたの子どもたちへ

秋の空

吉田 道代（臼杵市在住）

鱗雲がゆっくりと風の流れていく、校庭を砂埃が通り過ぎる。秋の午後。

少し和らいだ日差しの中で、幼い日の記憶が蘇っていく。私と祖母との会話。

私がまだ小学生の頃、運動の苦手な私にとって運動会の始まるこの時季は、とても憂鬱だった。

「みっちゃん、どげいしたん?元気がねえーでー。運動会の練習は進みよんの?」

「う〜ん。私、運動会は好かん!」

「どうしてね。」

「だっていつもどべやもん!」

かけっこが苦手な私は、保育園の頃からいつもびりだった。「今年こそは」と思うのだが、なかなか上手くいかなかった。

「みっちゃん、そげーことは気にせんでいいんで。お父さんもおじちゃんもおばちゃんもみんな遅かったんで。」

「ほんと?お父さんも遅かったん?」

「そうで、みんな遅かった。でも、全然気にせんでいいんで。どべがおらんかったら一番もおらんやろ?どべの人がおるけん一番になれるんで。胸を張って走りよ。」

「どべでもいいんだ」幼い私の心の中にこの祖母の言葉は、強く響いた。

運動会当日。私は、走った。コースを半分ぐらい進み、前の友達との距離が狭まってきた。もう少しで前の友達を抜きそうになった時、私は、つまずいて転んでしまったのだ。今年もどべ。自分の順位の旗の前に座り、足を見ると膝小僧の擦り傷からうっすらと血がにじんんでいた。でも、私は泣かなかった。万国旗の向こうの応援席の祖母を見てにっこりと笑っていた。走り終えた私にとって順位などもうどうでもよかったのだ。その時の私はゴールに入ったことだけですがすがしい気持ちだった。

私にとって憂鬱な出来事となるはずであったが、祖母の言葉でそれが一転した。

「どべがいるから一番になれる」

「どべ」であることにも意味があり、役に立っている。どれだけ私を勇気付けたらろうか。何をしても上手くいかない。それを笑う人もいるかもしれない。そして、それを一番恥ずかしいと思っていたのは、自分自身だったのだ。自分の無力さを見せ付けられる運動会を嫌い、終いにはどうしても早く走れない自分自身を嫌っていたのかもしれない。しかし、それではいけないのだ。何事も不器用でいつもどべの私をも「よくやったね、あなたも役に立っているのよ」と認めてあげることが大切なのだ、亡き祖母に教えられた。今の自分にそれが出来ているとは、まだ言えないが、自分自身を含め、私の周りの人に対しても理解し認めてあげられるようになりたいと思う。

5年前に祖母は他界した。三姉妹で祖母の思い出を語り合った時、一番に思い出したのが、この出来事だった。私にとってこの祖母の言葉がその後の私の人生においてどれだけ私を勇気付けていたか、その時初めて気がついた。

人は一番になりたくていつも競いながら走ってしまっている。「一番じゃなくてもいい。どべでもいい。」自分のペースで一生懸命に走ればいいのだ。結果がすべてではなく、どべにも意味があるのだ。

秋の空に鱗雲が流れていくように時もゆっくりと私の前を流れている。

「おおいた教育の日」エッセー
「一般の部」優秀賞

テーマ：おおいたの子どもたちへ

東日本大震災から学ぶ～仲間の絆～

竹永 祐子 (大分市在住)

平成23年3月11日 日本を驚異の渦に包んだ東日本大震災が突如起こり、多くの尊い命を奪っていった。子ども達は、毎日流れる悲惨な映像に何を感じ、何を考え、そして何を行動に移したろうか。子をもつ親として、今何を伝えなければならないだろうかと真剣に悩んだ。

あの日以来、メディアを通じて、また学校でも多くのメッセージが伝えられた。

「みんな、今日は学校で先生からどんな話があったの?」

そんな会話を家族でした。それから命の尊さ・当たり前の日常の幸せ、家族や友達と一緒に過ごせることのありがたさ、危険を省みず人命救助に徹する職業人としての使命感、さまざまなことを子どもたちに伝えた。どれだけ理解できたかはわからない・・・しかし一瞬でも被災者のことを真剣に考え、人の痛みの分かる人になって欲しい、そう願った。

もう一つ伝えたいことがある。それは「人との絆・仲間との絆の大切さ」である。人とひとのつながりが希薄化している昨今、地域のつながりも薄れつつある。しかし、被災地には強い地域の絆があった。

そして、今復興に向け原動力となっているのが、まさしくその「絆」である。震災の時、人や地域のつながりが命の明暗を分けることとなった。寝たきりの夫のそばから離れることができず逃げそびれた妻、地域住民を守ろうといつまでも避難を叫び続けた役場の職員、危険を冒しながらも人命救助に徹した消防士や警察官。家族や地域を愛するが故に帰らぬ人となった。一方で、深い絆から命を取り留めた被災者もいる。津波に飲み込まれそうになった時、仕事に行っていた息子が母の安否を気遣い自宅に戻り、ようやく助かった命。そこには強い「親子の絆」があった。逃げる時はみんな一緒に声かけあって逃げた。失っていない「地区の絆」。被災地は今、復興に向かって一歩ずつ前進している。そこにもまた「つながり」が大きな勇気となり、起動力になっている。

毎年感動を与えてくれる甲子園。今年の夏は「仲間の絆」がテーマとなった。始球式を務めたのは、宮城県気仙沼向洋高校の斉藤投手であった。同校は震災の大津波で校舎もグラウンドも使えなくなった。練習ができない間、部員たちは被災地でのボランティア活動に力を注いだ。結局、宮城大会では2回戦で惜敗という結果に終わった。被災地のさまざまな想い、そして部員全員の想いを胸に、念願の甲子園のマウンドに立ち、こん身の一球を投げ込んだ。

選手宣誓では金沢高校の石田主将が、「日本中のみんなが仲間です。私たちは精いっぱい笑顔で全国の高校球児の想いを白球に込め、この甲子園から消えることのない深い絆と、勇気を日本中の仲間届けられることを誓います。」と「仲間の絆」を強調した。両者共に苦難の末に仲間と共にたどり着いた高校球児だからこそ、全国にそして被災地に感動と生きる希望を与えた。

人は窮地に立った時、人の支えが苦難を乗り越える糧となることが多々ある。誰かが自分のそばにいてくれる、誰かの温かい一言や励まし、それが大きな勇気を生み出す。子どもらには、思いやりや仲間との時間、絆を大切にしたい。友と一緒に苦悩や喜びを共有し、がんばり通した時に生まれる「達成感」からゆるぎない「仲間の絆」が生まれる。仲間と共に涙しなさい。苦勞を乗り越え喜びにかえなさい。そして一緒に感動をわかち合いなさい。その一瞬一瞬の刻んでいる時間が「人生の宝ものなのだ」ということを感じながら成長して欲しいと願う。

テーマ：わたしの心に残ること

私の「家族」

佐伯市立佐伯南中学校 1年 浅利 里彩

私は4才の時、母に連れられて祖母の住む佐伯に帰って来た。以前住んでいた福岡とは違い、緑に囲まれた佐伯は、体の弱かった私にとって、とても過ごしやすい場所となった。

働きに出る母に代わって、祖母が私の世話をしてくれた。私はすっかりおばあちゃん子になっていった。祖母と一緒に近所を散歩するのが日課だったのだが、その途中で会う近所の“おばちゃん”達にもかわいがってもらえるようになった。まだ友達のいなかった私は、おばちゃん達とおしゃべりするのが楽しかった。

小学校低学年の時、通学路の大通りで安全確認をあまりせずに危険な横断をし、ひやっとしたことがあった。しかし、無事に渡れたので、特に気にとめていなかった。その夜、私は母と祖母に厳しく叱られた。その恐さに泣いてしまったが、ふと「なぜ知っているんだろう」と不思議に思った。が、謎はすぐに解決した。いつもかわいがってくれるおばちゃんはその現場を見ていて、母に報告していたのだ。母は言った。

「おばちゃん、『心臓が止まるかと思った』って、本当に心配してくれてたよ。悪いことはできん。近所の人達が見てるからね。」

福岡では同じ団地に誰が住んでいるのかも知らないほど、近所付き合いはなかった。そんな私達親子にとって、自分の子どものように心配してくれる近所のおばちゃん達の存在は、ありがたかった。「いつも誰かが見てくれる」と思うと、安心できた。

そんなおばちゃん達との思い出が、もう一つある。それは地区の盆踊りの練習だ。踊りは大変難しかったが、おばちゃん達はさすがに上手だった。子どもの頃から踊っている人もお嫁に来てから覚えた人もいた。おばちゃん達に教えてもらいながら、私もその伝統の中にいるのだと思い、嬉しくなった。

踊りの一つに扇子を使うものがあったのだが、私はいつも自分の安扇子を使って練習していた。練習を重ねるにつれ、どうにか踊れるようになった私に、一人のおばちゃんが、

「これをあげるから、使って。」

と、銀箔の付いたきれいな扇子をくれた。なんだか踊りの認定証をいただいた気分になった。あの嬉しさは忘れられない。

孤独死のニュースがあとをたたず、近所付き合いの薄さが問題となっている現代。そんな時代だからこそ、私は自分を育ててくれた近所の人達の愛情に感謝せずにはいられない。下校途中に会えば、「お帰り」「ただいま」が当たり前のあいさつとなっている。つまり地区全体が一つの「家」なのだ。

私もいつか、この「家」を巣立っていくだろう。その日まで、そこに住む「家族」を大切にして過ごしていきたい。盆踊りにも毎年欠かさずに行こうと思う。あの大切な認定証を持って。

テーマ：わたしの心に残ること

私の心に残ること

大分市立住吉小学校6年 藤本真理乃

「まり、バイバイ。」

私は去年の10月、5年生の時に福岡県から大分県の小学校に転校することになりました。県外という遠い所なので、福岡の親友とはなかなか会うことができなくなりました。

親友の鈴葉^{すずか}ちゃんとは4年生、桃花ちゃんとはようち園の頃から友達でしたが、5年生の遠足の時一人だった私をグループに入れてくれたことをきっかけに親友になりました。交かんノートをしたり、いつでも三人いっしょで、そういう毎日がとても楽しかったです。私はこんな日がずっと続くと思っていました。

ある日、転校するかもしれないとお父さんから言われました。その日私はとても落ちこんだのを昨日のように覚えています。次の日、二人を見るととても悲しくなりました。ずっと二人といっしょにいたい。私の心の中に悲しい気持ちがあふれました。

そして10月に、大分県に転校することが決まりました。でも、私はすぐに鈴葉^{すずか}ちゃんと桃花ちゃんには伝えませんでした。さよならを言うのがつらかったからです。それがある日、二人に転校することを伝えることにしました。きっかけは鈴葉^{すずか}ちゃんと私のちょっとしたけんかでした。けんかを原因にあまり口をきかなくなってしまう、このままでは転校する日までずっと気まずいままになってしまうと不安で、私は手紙を書くことにしました。転校すること、今までの思い出、私の言いたかったことを全て書きました。ノートを破って書いたので、気持ちが伝わるか心配でしたが、返事が来た時はうれしかったです。でも、その内容は「今までありがとう。住所とか教えてね。」と一行だけで、私がいなくなってもさびしくないのかなと思いました。

数日後、鈴葉^{すずか}ちゃんが一冊の手作りの絵本を私にくれました。絵本の中にはこう書かれていました。「私は泣きました。学校や習い事で見せなかった涙を母だけに。私は決めました。まりを笑顔で送り出し、さびしかったらがまんせずにさびしいと言うことを。」私はとても感動しました。私のためだけに作ってくれた絵本。これは私の宝物の一つとなりました。

学校での最後の日、二人だけでなく多くの友達が私に声をかけてくれて、とてもうれしかったけどさびしい気持ちがどんどん大きくなっていくのが分かりました。

「まり、バイバイ。またね。」

二人はいつもと同じように笑顔で送り出してくれました。いつも口にしていない言葉なのに、こんなに悲しい言葉になるとは思いませんでした。

今はなかなか会えないけれど、おたがいの様子を手紙でやりとりしています。手紙でも二人の気持ちが伝わってきます。ありがとう。大切な大切な私の親友。ずっとずっと大好きだよ。

テーマ：わたしの心に残ること

おばあちゃんの書

大分県立大分豊府中学校3年 田崎 萌亜

私の祖母は80歳。病気がちで、大分、よぼよぼですが、趣味は書道。若い頃からずっと続けているそうです。祖母は、よく大会等に出品し、入賞することもあり、とても字がうまいです。

これは、ついこの間のことです。祖母は『県美展』というのに出品しました。私はそれを知らなかったのですが、私の母が新聞に祖母の名前があるのを発見しました。入選でした。私は祖母に電話しました。

「あ、おばあちゃん。入選、すごいね。おめでとう。」

すると、

「ありがとう。いやー、嬉しいな。」

という、かん高い声が聞こえました。それと、「ランララン」という陽気で嬉しそうな祖母の歌声が聞こえました。

そうして、祖母を連れて、県美展に飾られてある、祖母の書を見に行く日になりました。入賞や入選した作品は県立芸術会館に飾られているのです。祖母はよぼよぼしているのですが、一緒に歩くときは、いつも私が、手をしっかり持ち、支えています。ゆっくりと歩いてあげて、気をつけてあげないといけないから、大変だけど、私はなんだか、それが好きです。

祖母を支えて、一緒に歩きながら、いろんな作品を見ました。そして、祖母の書がありました。それは、

私 八 傳 成 努 精 孫
は 十 わ 果 力 一 ち
一 杯 歳 の つ が の の 杯 の ち
杯 せ の て が の の の の の の

という、力強い書でした。支えがないと歩けない祖母が、私と妹への愛にあふれる作品を頑張って書いてくれたんだと思うと、胸のあたりがじんとし、涙があふれそうでした。私はなぜ、祖母の手を引き、歩くのが好きなのか、分かりました。それは、祖母からの愛が伝わるからです。私のことを愛し、頼ってくれているのが伝わるから好きなんだと思います。電話をしたときの、いつものあの声には、私達の声が聞けて嬉しいという気持ちが表れているんだと感じました。

私は今まで、勉強の忙しさを理由に、あまり会いに行かず、電話もあまりしていなかったのですが、これからはもっともっと、祖母に優しくして、私からの愛も伝わるようにしたいです。

最後に、おばあちゃんありがとう。大好きだよ。これからも元気に、書道を続けてね。

テーマ：わたしの心に残ること

重度障がい者施設を訪れて

大分県立津久見高等学校2年 高野 倫佳

去年の11月13日。私にとって、とても貴重で忘れられない経験がありました。私は合唱団に入っています。

合唱団の奉仕活動では、老人ホームや幼稚園・保育園・小学校や病院・児童福祉施設など、色々な場所へ訪ねて行きます。

児童福祉施設。ここでの体験は今でも忘れられません。いつものように、バスに揺られてついたのは、『恵の聖母の家』という重度の障がいを持った人が利用している施設です。私以外の団員は二度ほど訪れたことがあり、「今回で三回目だよ。」と言っていました。しかし私は、その時が初めてでした。バスの中で、『重度』といわれる人たちが一体どんな人たちなのか、想像していました。

私は、利用者さん達の部屋へ入って行きました。まず、目が会った人は、手足が曲がっていて、今にも飛び出しそうな目で私をにらみつけ、何かを叫んでいました。

目・耳に続いて鼻。自分の立ち位置につき、さっきまでの怖さが和らいできた時、ものすごい臭いが鼻をつきました。クラクラして、リハーサルの時にキレイな印象を持った部屋の空気の変わり様に、私は驚きました。

きっと強ばった顔のまま、うたっていたと思います。だいたいのいつものパターンで、まずうたっているのを聴いてもらって、それから利用者さんの中へ入って一緒にうたうことになりました。

私は二人の利用者さんにつきました。一人は、ずーっと別の方向を向いていて、私の方を見てくれませんでした。もう一人は、ずーっとよだれを垂らしていて、大声をあげていました。

うたい始めてもその状態が続いていました。どうしたらいいのかわからなくて悔しかったのと同時に、「もしかしら、うれしかったり楽しかったりするから、その感情を私に伝えてくれようとして、何か訴えているのではないか」と思うと涙があふれてきました。そうやって、どうにか伝えようとしていることが私はわかってあげられなくて、「汚いから」と利用者さんの手を取ろうとしなかったし、そういう気持ちを見抜いているから、「そっぽを向いたままなんじゃないか」と考えました。

まだ少し怖かったけど、思いきって手を取りました。すると、本当にこっちを向いてくれました。よだれも思いっきり付いたけど、うれしい気持ちの方が大きかったです。そして、耳元で大きな声でうたっていると、反対に私の耳が利用者さんの口元に引っぱられて小さな声で何かをつぶやきました。はっきりと言葉にはなっていないけれど、確かに「ありがとう」と伝わってきました。

胸がとても熱くなりました。「ありがとう」というたった五文字の言葉で涙がでてくるなんて思っていませんでした。

自分の感情を素直に出せるための、言葉を持っているのに、それを表さないことは、とてももったいないと思ったし、その為の知識や身体を持っていることにすごく感謝しなければならないと思いました。家族をはじめ、先生・友だち・合唱団の仲間・その他今まで私に関わって来てくれた方たちに感謝します。

「ありがとう。」

そして、これからどんな人生を送るかわからないけど、これから関わる方々。

「どうぞよろしくをお願いします。」